

氏 名	佐藤 恭子
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 の 番 号	甲第 217 号
学位授与年月日	2019（平成 31）年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	20 世紀初頭モードの転換期における女性観の変容 －東洋趣味モードの影響に関する一考察－
論 文 審 査 委 員	主査 大塚美智子 （生活環境学専攻 教授） 副査 細川 幸一 （生活環境学専攻 教授） 副査 森 理恵 （生活環境学専攻 教授） 副査 佐々井 啓 （本学 名誉教授） 副査 徳井 淑子 （お茶の水女子大学 名誉教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

〔研究の意義と目的〕

本論文の目的は、20世紀初頭、特に第一次世界大戦までのフランスの服飾を「東洋趣味モード」と「近代的フランス女性」の関係という視点で考察し、東洋趣味の実態と受容した女性の様子を明らかにすることである。

東洋趣味モード出現の背景としては、19世紀後半、フランスの植民地支配が進み帝国意識がうまれた反面、非西洋諸国の文化への関心が高まっていった状況があげられる。また、フランスは産業革命を経て経済的好調期をむかえたことで、新しい生活様式や文化が大衆層まで広がった時代でもあった。このころ相次いで開催された万国博覧会もまた、市民が異国の文化を見聞することのできる機会となった。つまり東洋趣味がモードに応用される以前に、異文化への関心という素地がこのようにして築かれていたのである。

一方、20世紀初頭のモードは、芸術面において自然主義的な曲線美を表現したアール・ヌーボー様式が全盛期をむかえた時期であり、女性の身体の曲線を最大限に生かしたSカーブ・ドレスが主流であった。ドレスのシルエットは、旧来から女性の下着として必需品とされていたコルセットによって極端なまでに締め付けられて成形されたものである。コルセットの身体への害が唱えられ、コルセットなしのドレスが提案されても、婦人はコルセットを着用しなければならぬという16世紀から続く伝統的服装マナーの支配は根強く、パリ・モードが大きく変化したのは、第一次大戦後の1920年に入ってからのことである。デザインは単純化し、従来の服装マナ

一においてはタブーとされていた「コルセットを着用しない」スタイルが広く受容されていくことになる。大戦は、女性を労働力として借り出すことでモードを停滞させたが、戦後のモードにおける女性解放を容易に進めることとなった。

しかしながら、第一次大戦までコルセット付きのドレスが続いていたわけではない。本論で取り上げる第一次大戦前の東洋趣味モードは、その転換期の最中に登場した流行の1つである。転換期には、デザイナーの誕生、百貨店の創立、モード情報を伝える広報媒体の発達、モード受容層の拡大など、モード界に変化を引き起こす様々な要素が混在していた。東洋趣味モードは、このような背景において、女性の服装が近代化を遂げるまでの混沌とした過渡期に流行したのである。

東洋趣味モードは、パリにおいて女性を熱狂させたことが先行研究で示されており（デュ・ロゼル, 1995）、斬新な着想源から生まれたデザインという点で評価されている。20世紀初頭のモード史を解説する上では避けられない事象であるにも関わらず、他の流行と同様に一過性の流行としての紹介にとどまっており、これまで社会的な位置付けを論じられたことはほとんどない。

一方でモードと関係深い社会事情として、モードを受容する側に起こった解放、自由独立、権利の平等を目指した女性運動があげられる。フランスにおける女性運動は、1880年頃、ブルジョワ共和制の決定的な成立とともに出現し、女性の権利拡張運動や、フェミニズム思想の拡大など、近代的フランス女性の誕生に大きく前進した。婦人雑誌Féminaにおいても女性権論者の様子が、モード特集に挟まれるような形で紹介されている。また、パンタロン風の服飾が発表されると、即座に女性の異性装と結びつけられ、風刺画の対象となっていることから、近代化における女性の変化は時代の中心的な話題であったことがわかる。

モードとは、「自立的な進化を有している」一方で、「すべてを包括するようなひとつの社会現象として理解されなければならない」のであり「諸々の要因がすべて作用しあった結果」である。しかし、20世紀初頭の女性の意識変化と東洋趣味モードについて相互の関係性についてはこれまで検証されていない。そこで、本論では、フランス女性が東洋趣味モードを受容した状況について、どのようなコンテキストで、フランスとは異なる女性観をもつ異国の衣文化に触れて受容に至ったのか、またそこに「女性らしさ」を見出していったのか、解明を試みるとともに、20世紀初頭の女性の近代化における東洋趣味モードの位置づけを明らかにしていくことを目的とした。

本論では、東洋趣味の実態と受容した女性の様子を明らかにするために、一次資料として、20世紀初頭の購買層と紙面の傾向の異なる婦人雑誌を用いた。主に用いた婦人雑誌は、Journal des dames et des modes(ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード)、Fémina(フェミナ)、La mode pratique(ラ・モード・プラティック)である。これらの雑誌は、それぞれ発行部数や価格帯から異なる購買層を持っている。1912年～1914年までの間に限定1279部刊行された手彩色版画付きモード誌Journal des dames et des modes は高級婦人雑誌である。Féminaは、1905年時点で、年間13万5000部刊行されたブルジョワ向けの婦人雑誌である。実用モード週刊誌La mode pratiqueは、1900年時点ですでに年間30万部を超える中流階級よりも幅広い購読者層を持つ婦

人雑誌である。有名クチュリエの服飾デザインの検証だけでなく、広い層にどのようにデザインが受容されていったのか様子を知る上で有用であるといえる。また、20世紀初頭のモードの転換期の実態と東洋趣味モードの特異性を確認するため、*Journal des dames et des modes*は全巻、*Fémina*は創刊～1919年まで、*La mode pratique*は1906年～1919年の間の可能な限り閲覧した。さらに、市民一般向けの挿絵入り新聞として週刊新聞*L'Illustration*（リリュストラシオン）を資料に加え、そのモード欄についても検証した。

これまで20世紀初頭フランス服飾研究は、上流階級のためのクチュリエによる華やかなデザインに注目し、独創性や着想の原点を明らかにすることを中心に行われてきた。本論では、女性がモード情報源とした婦人雑誌のモード欄や批評記事のほか、風刺画などを検討することにより、衣服を着用する側の女性に着目して東洋趣味モードを考察し、フランスの近代的女性観を解明することを試みた。

〔本論〕

第1章では、20世紀初頭のパリ・モードの転換期について、変化の要因が数多くある中でも、特に1909年から1914年を中心に、モード受容層である女性の変化と受容層の拡大を踏まえて、東洋趣味モードとモード情報源の関係について検討した。特に婦人雑誌の特徴を導く過程においては、複数の同時代の雑誌に挿入されたイラストによる彩色ファッションプレート（以降ポショワールとする）の比較を行い、その特異性を明らかにした。

20世紀初頭のモードの転換期におけるモード受容層の女性は、女性運動の活発な時代に多様な価値観をもつ女性の中でも、特に急進的フェミニストではない、むしろ家庭的要素を持つ「女らしい」女性によって支えられた。19世紀後半に新しくパリ・モードを支えるシステムとしてオートクチュールが確立すると、それらのモードを受容する女性は、産業構造の変化を背景に、大富豪である上流階級から中小ブルジョワジーと呼ばれる市民まで広がっていった。

モード受容層が拡大すると、最新のオートクチュールを模倣しようと、モード情報を伝える媒体が発達する。雑誌は、購買層や、趣向に合わせて対象別に様々な種類の雑誌が刊行された。また、印刷技術や写真技術の革新により、婦人雑誌の表現は豊かになるが、その進歩の中で、逆行するかのように登場したのが、ポショワールであった。

写真によるモード情報は、生身の人体に着用させることで服飾をより現実的に伝えることに成功したが、価格的な問題から、モノクロが多かった。一方でイラストによるプレートは、「色鮮やかに」、「動きある」描写で、「舞台のような設定」で流行を伝えている。それは、イラストレーターの巧みな技術によるところが大きく、色彩、芸術性、宣伝力で優れていた。またそのイラストレーターの多くが東洋趣味の色鮮やかで芸術的なプレートを描いていた事実から、東洋趣味モードのエキゾチックな世界観を認知させることに貢献したことを分析した。

第2章では、東洋趣味モードについて言及する前段階として、フランスにおける「東洋趣味・女性・モード」の三者の関係性を考察するため、婦人雑誌*Fémina*を主な資料とし、掲載された異国に関連する記事を検討した。

フランスをはじめとするヨーロッパ諸国とオリエント世界は、軍事的、政治的、経済的目的で長い間交流関係があった。その歴史がオリエントに対するエキゾティックなものへの憧れを作り出していったといえる。フランスがオリエントの生活文化に関心をもつに至った代表的な出来事といえば、1798年のナポレオンによるエジプト遠征である。エジプトの神秘は、考古学者のみならず作家や画家の関心を東方へとむかわせ、旅行記や絵画でオリエントの風景、ハレムや女性など生活文化をパリに広まっていった。また、19世紀末から20世紀にかけて開催された万国博覧会も、フランス市民の多くが異国の文化と接触する機会となった。さらに博覧会は、オートクチュール創設者のウォルトが出演したり、東洋趣味モードの先導者の一人であるポワレが博覧会を訪れたりしていることから、異文化とモードが直接的に関係した出来事でもある。

20世紀初頭のフランス女性と東洋趣味については、婦人雑誌の記事の内容から、まずは、受容側の女性の教養として異国に関する情報が発信されていたことがわかった。20世紀初頭の記事には、パリを訪れている異国の王妃や外交官の夫人の生活、フランス女性の異国旅行記、異国へ嫁いだフランス女性の報告、異国を主題とした舞台や小説の紹介などが頻繁に掲載されるようになることから、異国趣味は女性の教養として主要なテーマとなっていたことがうかがえた。

異国趣味とモードについては、購買層の異なる婦人雑誌のモード欄においてその受容を考察した、当初は、仮装パーティの衣装が異国趣味として登場していた。その後中国風コート、日本風コート、きもの風室内着、イスラム風ミナレ・チュニック、ハレム・パンタロン、小物では、ターバンなど、さまざまな異国趣味を漂わせるスタイルが掲載されていった。オリエンタリズム同様、ハレムの女性や、お菊さんをイメージする日本女性など、身分的に低く、哀憐の対象であり、性的な魅力を含んだイメージが原点にあるにも関わらず、ペルシア風モードや、日本風モードは、根強い人気を得ていることを確認することができた。

以上のことから、教養人から広まっていった異国趣味が、婦人の教養テーマとなっていたことにより、異国趣味モードにつながったという経緯を読み取ることができた。また、エキゾティックな対象を見るときの西洋側は、支配者としての先入観が入り込んでいたにもかかわらず、パリ・モードは非西洋国の衣文化を日常に取り入れていたことがわかる。

第3章では、異国趣味モードと大きな関わりが指摘されているディアギレフのバレエ・リュスの活動について考察し、ペルシア風モードの実態を明らかにするとともに、具体的にどのような影響があったのか検討した。特に、バレエ・リュスの初期の作品に多くみられた東洋の主題の作品の舞台装置・衣装を担当した美術家レオン・バクストの多岐にわたる活動を、婦人雑誌、週刊新聞から考察することで、モードの転換期と彼の活動の関わりを明らかにした。

1909年のパリ公演については、様々な広告媒体で紹介されたバレエ・リュスであるが、婦人雑誌では特集が組まれるほどであった。このことから、当時の単なる娯楽の一貫としての舞台鑑賞にとどまらず、モード受容層への影響力は大きなものであったことがうかがえる。また、ポール・ポワレがいくつかの異国趣味スタイルを既に発表していたことと、パリの異国趣味への関心が高まった時代性に適合し、バクストによる舞台、衣装デザイン、とりわけ『シエラザード』のエキゾティックな世界観と色彩感覚はパリを熱狂させ、結果的に異国趣味スタイルを流行へと押

し上げることに貢献した。しかし、バクストの東洋趣味モードへの貢献はバレエ・リュスから発信されるものだけではなく、グラン・クチュリエであるパキヤンとのコラボレーションなど、服飾デザインにも参加することで、よりモード受容層に近づいていくことに成功したといえる。

以上のことから、娯楽であり婦人の教養の一部でもある舞台鑑賞においても、異国趣味は注目のテーマであり、その舞台衣装とエキゾティックな世界観が、女性のモードに影響を与えたことを明らかにした。特にバクストは、ポワレに並ぶ、東洋趣味モードの「もうひとりの立役者」として、バレエ・リュスのインパクトを宣伝効果とし、パリ・モードの転換期の東洋趣味モードを大きな流行と変えることに貢献したことを明らかにした。

第4章では、パリの異国趣味モードの中でも、ジャポニズムがクチュリエに大きな影響を及ぼしてきたことはすでに指摘されているが（深井,1994）、異国趣味モードを象徴する服飾品のひとつでもある日本の着物について、フランス側のデザインの解釈と受容という視点から再考した。検討方法としては、婦人雑誌のモード欄から、「キモノ」「日本風」など、日本に関連する用語が解説に記載されているものを年代順に抽出、分析することで、着用する女性がデザインに何を求め着物を応用したのかを検討した。

パリ・モードにみられる「キモノ」は、19世紀末から20世紀初頭の短い間で大きな変化をみせた。19世紀後半、女性の服飾において、初期に見られた室内着としてのキモノや、仮装パーティの衣装としてのキモノは、日本の着物の原型をとどめていた。しかし、その後のキモノと称される様々な服飾アイテムは、もはや日本の着物の原型が容易に確認できるものは少なくなっていた。それらは、西欧の衣服制作のデザインソースとして、着物の各パーツの特徴を変形させながら取り入れて、パリ風に変化させた新しい「キモノ」であった。フランス独自の解釈で応用された「キモノ風の服飾」は、流行の大衆化の波にのり、多くの種類が登場した。キモノデザインは、総じてゆとりという機能性を持ち、比較的簡易に制作できる実用性をともなっていたため、モードの新受容層である中産階級にとって、取入れやすい流行スタイルであったといえる。また着物の原型をとどめないデザインに対しても「キモノ」という東洋的な名称で紹介されつづけた様子から、東洋趣味モード、特にキモノ風デザインの人気が浸透していたといえる。

第5章では、異国趣味モードの一例としてローブ・アントラベや、ジュップ・パンタロンなどのハレムパンツから着想を得たデザインの登場と受容の様子について、モード欄、批評、風刺画などの言説を検討し、女性観の変化という視点から考察した。パンタロン風の新しいスタイルは、ペルシア風モードを構成するアイテムのひとつとして登場した。このスタイルは、西洋の女性のためのモードなハレムパンツを実現するために、改良という段階を経て、いくつかの種類を生み出した。まず、1910年、パンタロン風スタイルの第一段階としてジュップ・アントラベが登場し、改良版ともいえるのが、1911年のジュップ・キュロットである。両者ともに新作が発表されるや否や、新聞、婦人雑誌に取り上げられ、そのエキゾティックで一風変わったデザインについての解説や高難度の着用方法、着用に対する憂慮、機能的側面などが各誌で紹介された。さらに風刺画としても複数描かれており、注目の題材となっていたことがうかがえる。そもそも20世紀初頭は、西欧の伝統的な考えが依然として残っており、ズボン（以降、パンタロンとする）

は男性の権利を象徴する服飾アイテムであるとみなされていた。女性がパンタロンを履くことは、法律的にも、限られた条件を除いて禁止されていた。制作者側には改良が要され、受容側には憂慮がみられた原因には、このような背景が関係していたと考えられる。疑似的パンタロンに見せるための制作技術が必要とされる一方で、男性のパンタロンに見えないように工夫する必要があった。また、風刺画は、新しいデザインを男性服の特性をもつパンタロンを女性も着用しているという前提での揶揄がほとんどであった。しかし、当時としては斬新なスタイルであったため、一過性の流行として終了していた一方で、既制服としてのジュープ・パンタロンが登場している。既制服の登場は受容層の拡大を意味している。足枷スカートから改良されたジュープ・キュロットは、「動くことを可能とした」、つまり旅行や、車などにも乗り降りする動きやすさが備えられていた。ジュープ・キュロットは、あくまで、女性のための異国趣味モードの一環として作られてきたパンタロン風スタイルであり、派生の経緯をたどると男性のためのパンタロンとは一線を画していることは明白だが、新時代の女性の活動範囲が広がる中、「時代に合ったエレガントなスタイル」として受容されたと考えられる。

〔結論〕

本研究により導き出されるのは、図1に示すとおり「東洋趣味モード」と「近代的フランス女性」の間には、新たな女性像の創造という点で相関関係が見られたことである。

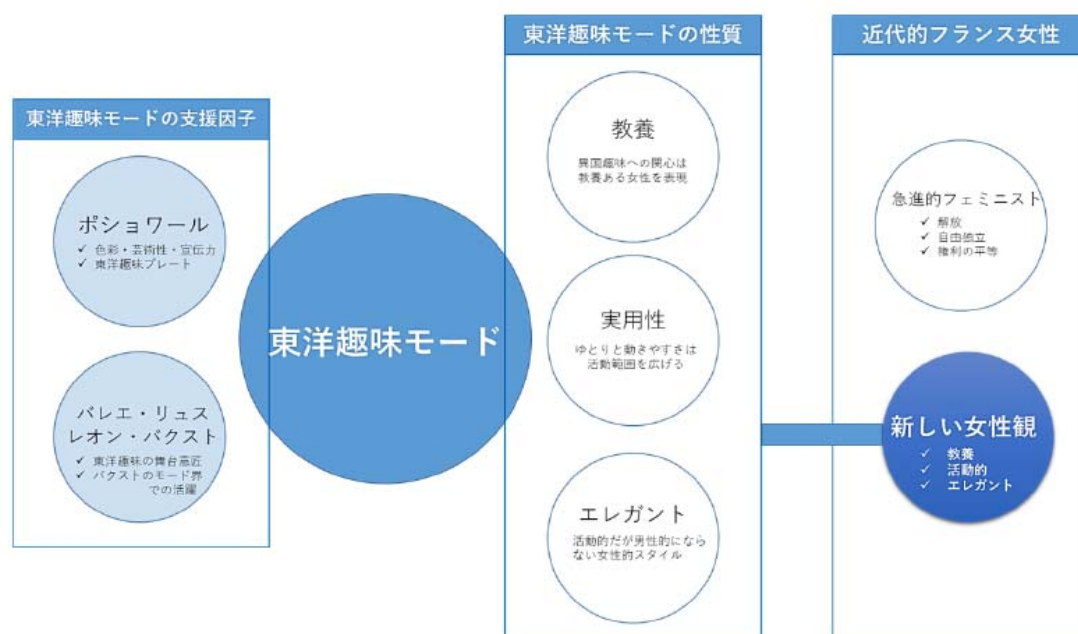


図1 東洋趣味モードと新しい女性観の関係

まず第1章、第3章より、東洋趣味モードを支えた2つの因子が明らかになった。

1. 東洋趣味モードはポショワールの貢献により受容層に伝えられた

2. バレエ・リュスのバクストの人気とモード界の活躍が東洋趣味モードを広めた
また、第2章、第4章、第5章より、東洋趣味モードの3つの性質が明らかになった。
3. 教養ある女性が旅行に訪れるなど異国趣味への関心は、良い趣味であり、教養ある女性を表現することができる
4. 東洋趣味モードの「ゆとり」「動きやすさ」などの実用性は、女性の活動範囲を広げる
5. 東洋趣味モードのエレガントさは、活動的な服装だが男性化を避けて女性らしさを実現できる

以上の結果から、近代的フランス女性という視点から考察していくと、近代的フランス女性の中でも、東洋趣味モードを受容した女性は、教養により知性を備え、実用性によって支えられた活動的な生活を目指し、さらに、男性と同化することのない女性固有の魅力を表現することも忘れない新たな女性像を実現させたといえる。つまり、パリ・モードは、女性観の異なる異国の衣文化と接触することにより、急進的フェミニストではないが活動的で、パリ・モードをエレガントに嗜むことを継承する新しい女性観を誕生させたといえる。本論文は、20世紀初頭のフランスの服飾を「東洋趣味モード」と「近代的フランス女性」の関係という視点から考究し、モードが女性の近代化に影響を与えたことを証明した重要な事例研究といえる。

参考文献

- BARD, Christine, Une histoire politique du pantalon, Seuil, Paris, 2010
- DAVIS, Mary, E., Ballets Russes Style, Reaktion Books, London, 2010
- LAPIERRE, Nicole et PAILLARD, Bernard, La femme majeure: nouvelle feminite, nouveau feminisme, Seuil, Paris, 1973 (ニコール・ブノワ＝ラピエール、ベルナール・パイヤール共著『大いなる女性—フランスの婦人解放運動』古田幸男訳、法政大学出版局、1977)
- Marc-Alain Descamps, Psychosociologie de la mode, PUF, 1979 (M-A.デカン『流行の社会心理学』杉山光信・杉山恵美子訳、岩波書店、1982年)
- MARTIN-FUGIER, Anne, Les salons de la IIIe République. Art, littérature, politique, Perrin, Paris, 2010
- MONNEYRON, Frederic, La sociologie de la mode, Presses Universitaires de France, Paris, 2006 (フェデリック・モネイロン『ファッションの社会学：流行のメカニズムとイメージ』北浦春香訳、白水社、2009年)
- RABAUT, Jean, Histoire des féminismes français, Stock, Vanves, 1978 (ジャン・ラボー『フェミニズムの歴史』加藤康子訳、新評論、1987)
- ブリュノ・デュ・ロゼル『20世紀モード史』西村愛子訳、平凡社、1995
- 深井晃子『ジャポニスムインファッション—海を渡ったキモノ』平凡社、1994

論文審査結果の要旨

本論文は、20 世紀初頭、特に第一次世界大戦までのフランスの服飾を「東洋趣味モード」と「近代化により多様化するフランス女性」の関係という視点で再考し、フランス革命以降、社会の主演となったブルジョアジーの女性の服飾に東洋趣味モードがどのように影響したかを明らかにしたものである。

20 世紀初頭のモードは、芸術面において自然主義的な曲線美を表現したアール・ヌーボー様式が全盛期をむかえた時期であり、ドレスのシルエットは、旧来から女性の下着として必需品とされていたコルセットによって極端なまでに締め付けられて成形されたものである。

本論で取り上げる第一次大戦前の東洋趣味モードは、パリにおいて婦人を熱狂させ、斬新な着想源から生まれたデザインという点で評価されているが、これまで社会的な位置付けを論じられたことはほとんどなく、20 世紀初頭の女性の意識変化と東洋趣味モードとの相互関係についても検証されていない。本論ではフランス女性が東洋趣味モードを受容した状況について、どのようなコンテキストで、フランスとは異なる女性観をもつ異国の衣文化に触れて受容に至ったのか、解明を試みるとともに、20 世紀初頭の女性の近代化における東洋趣味モードの位置づけを明らかにしている。

資料は購買層と紙面の傾向の異なる婦人雑誌、Journal des dames et des modes 全 79 巻、Fémina 全 79 巻、La mode pratique であり、各誌全記事を一次資料としている。また、市民一般向けの挿絵入り新聞として週刊新聞 L' Illustration を加え、膨大な資料を分析している。

第 1 章では、20 世紀初頭のパリ・モードの転換期について、モード受容層である女性の変化と受容層の拡大、そして東洋趣味モードとも関連するモード情報源について検討し、20 世紀初頭のモード受容層の女性は、急進的フェミニストではない、家庭的要素を持つ「女らしい」女性であることを明らかにしている。また情報媒体として、写真技術が進み、写真でモードを紹介する雑誌などが増える中、彩色版画のファッションプレートが蘇ることに着目し、ファッションプレートを分析し、彩色のイラストによるファッションプレートが、東洋趣味モードのエキゾチックな世界観を広く認知させることに貢献したことを明らかにしている。

第 2 章では、異国趣味モードについて言及する前段階として、フランスにおける「異国趣味・婦人・モード」の 3 者の関係性を考察している。特に、婦人雑誌フェミナの記事を主な資料として、受容側の女性の教養として広がっていった経緯について考察し、20 世紀初頭の異国趣味は、限られた教養人による異国への関心が、パリにおいて日常の関心ごととなり、モードを仕掛けるクチュリエの興味となり、婦人の教養となり、流行につながったという系譜を明らかにしている。また、一般的にはエキゾチックな対象への視点は支配者としての先入観が入り込んでいると考えられるにもかかわらず、パリ・モードが非西洋国の衣文化を日常に取り入れたことに焦点を当

てて考察している。

第3章では、異国趣味モードと大きな関わりが指摘されているバレエ・リュスの活動とモードの関係について再考し、ペルシア風モードの実情を明らかにするとともに、特に、バレエ・リュスの初期の作品に多くみられた東洋的主題の作品の舞台装置・衣装を担当した美術家レオン・バクストの多岐にわたる活動を、一次資料から再考することで、モードの転換期と彼の活動の関わりを明らかにしている。

第4章では、異国趣味モードを象徴する服飾品のひとつでもある日本の着物について、フランス側のデザインの解釈と受容という視点から再考している。一次資料から、「キモノ」「日本風」など、日本に関連する用語が解説に記載されているものを年代順に抽出し、分析することで、着用する婦人がデザインに何を求め着物を応用したのかを導出している。また、本論では着物が異国趣味モードに影響を与えていく過程で、「キモノ」という他国の言語が、モードの一つの記号として成立していく様子を明らかにしている。

第5章では、異国趣味モードの一例としてローブ・アントラベや、ジュップ・パンタロンなどのハレムパンツから着想を得たデザインの登場と受容の様子を検討し、女性観の変化という視点から考察している。ジュップ・キュロットは、あくまで、女性のための異国趣味モードの一環として作られてきたパンタロン風スタイルであり、派生の経緯をたどると男性のためのパンタロンとは一線を画していることは明白だが、新時代の女性の活動範囲が広がる中、「活動的女性ためのエレガントなスタイル」として受容されたと分析している。

以上から、「東洋趣味モード」と「近代化により多様化するフランス女性」とは、新たな女性像の創造という点で相関関係が見られることが明らかになった。

20世紀初頭のフランスの服飾を「東洋趣味モード」と「近代化により多様化するフランス女性」の関係という視点から考究した本論文は、まさにモードが女性の意識を変えたことを証明する社会科学的側面を持つ重要な事例研究であり、審査員全員一致で博士（学術）を授与するに値すると判断した。

今後は当時の社会構造についての分析をさらに深め、東洋趣味モード流行の主役になった人たちの社会的位置付けについて時代背景から社会科学的に十分な考察を行うことを期待する。